

寺子屋玉松堂関係資料

市指定文化財 個人蔵

寺子屋は江戸時代から明治時代の始め頃までの教育機関です。主に庶民の子どもを対象にして、村や町の有識者や僧侶、神主、医師、武家などが師匠となり、読み方や書き方、計算などを教えました。江戸時代の中期頃から江戸や大坂、京都などの大都市で普及し始め、次第に地方へと広がりをみせ、後期になるとその数が激増していきました。県内には1千300を超す寺子屋があったとされ、市内でも20軒の寺子屋と41人の師匠の存在が確認されています。その中の一つが写真の日記を残した玉松堂です。

玉松堂は野村下組の名主を務めた植田家の分家である植田音次郎が開いた寺子屋です。音次郎は若い頃は江戸に出て方位占いなどをしていましたが、本家の当主で兄の加左衛門が死去したため、嘉永3年（1850）に野村に戻り、おいで名主を継いだ伝之助の後見となりました。そして屋敷内の別宅で玉松堂と号する寺子屋を始めたのです。評判を聞いて次第

に筆子（生徒）も集まり、より広い建物が必要になったのですが、筆子から普請の費用を取り立てるわけにもいかず、安政3年（1856）には寺子屋で文房具の商いを始めました。しかし、寺子屋で商売をすると逆に筆子の負担が増えるので、こちらは1年ほどで廃業したようです。

玉松堂には写真の日記や記録類、安政5年から明治4年までの門入証文帳が残されています。これらによれば、筆子は入門の際に謝礼金や酒代などを納めていました。また、しつけにもかなり厳しかったようで、修学態度が悪い筆子を破門したり、母親の言うことを聞かない筆子にはわび状を出させたりしています。門入証文帳に記された筆子は218人で、地元の野村をはじめ、埼玉村、屈巢村、広田村、関新田、袋村、堤根村など周辺の村々から集まっていました。



日記帳

門入証文帳

玉松堂は幕末から明治にかけての地域の教育機関としての役割を果たすとともに、明治以後の学校教育導入の下地ともなっていました。

（郷土博物館 鈴木紀三雄）

特定非営利活動法人
ふるさと創生クラブ

「地域の自然を守り次世代に伝えていくとともに、地元に住む子供たちを見守り育てていく」という目標を掲げ、精力的に活動しているのが特定非営利活動法人ふるさと創生クラブです。

同法人は平成16年1月に発足し、現在、会員58人と企業会員1社が所属。主な活動として行っているのが、西小学校1年生を対象にした付き添い下校です。13年間毎日欠かさず、会員が各下校班に付き添い、最後の一人が家に入るまで子供たちの安全を見届けています。また、子供たちに大人気なのが、自然を体験してもらうための会員手作りのピオトープです。授業でピオトープを訪れた子供たちは、魚取りやザリガニ釣りなどの遊びに夢中になるそうです。他にも、放課後や長期休暇に開催する教室で、ペーゴマや紙ひこうき、水鉄砲などさまざまな遊びを教えています。

子供たちの笑顔と「ありがとう」の言葉が活動の糧になっていると話す会員の皆さん。成長を見守る目は温かく、生き生きと輝いていました。

【代表理事】今村 武蔵 【電話番号】553-0265

つながる ひろがる
みんなのチカラ

～市民公益活動団体紹介～⑤



会員による付き添い下校の様子

今月の表紙

4月2日、「陸王杯 第33回行田市鉄剣マラソン大会」が開催されました。

本市の老舗足袋業者を舞台にした池井戸潤さんの小説にちなみ「陸王杯」と冠した今回の大会には、市内外から3,126人が出場。古代蓮の里を出発したランナーは、桜の咲き始めたさきたま古墳公園を巡るコースを気持ちよさそうに駆け抜けました。

- 市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。
- 市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
- 市報をダイジー版に録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。



環境にやさしい
植物油インキ

市報ぎょうだは
再生紙を
使用しています